

はしがき

核兵器をめぐる2つのトレンドがせめぎ合っている。

ひとつは、2017年7月に成立した核兵器禁止条約に代表されるような、核兵器を絶対悪とみなし、これを規制していこうという動きである。本書の題名を、思い切って『核兵器禁止条約の時代』としたのも、これがひとつの時代的潮流を成しつつあるとの私たちの基本認識がベースにある。

いまひとつの流れは、核戦力を強化し、その使用のハードルを下げようとの動きだ。米国のトランプ大統領は核兵器使用に対して以前の大統領よりも躊躇が少ないと見える。ロシアには中距離核戦力配備の疑いがかけられ、トランプ政権はINF(中距離核戦力)全廃条約からの離脱を表明した。トランプの「核態勢の見直し」(NPR)は、ロシア・中国に対する敵愾心をあらわにして、核兵器使用のありうるシナリオを拡大し、新型核兵器開発への意欲を公然と示している。

2017年までの状況に関して言えば、これらに加えて、北朝鮮の核・ミサイル開発をめぐる米朝の激しい応酬があった。しかし、この不毛な対立は2018年に入って一転し、米国と北朝鮮を立て役者とする和解の舞台が開けつつある。

本書は、長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)が編集し、歴史あるテイラー&フランシス社によって出版されている英字学術誌 Journal for Peace and Nuclear Disarmament (J-PAND、『平和と核軍縮』誌)から、この2つの潮流に関する論文を精選して和訳し、1冊の本にまとめたものである。第一のトレンドがI部に、第二のトレンドがII部・III部に、それぞれ照応する。

旧長崎医科大学時代に原爆の惨禍を被った長崎大学の肝煎りで2017年12月に創刊されたばかりのJ-PANDは、オンライン版のみのオープンアクセス・ジャーナルである。すなわち、パソコンやインターネット環境さえあれば、世界の誰でも無料で論文を読むことができる。

さらにJ-PANDの論文は、クリエイティブ・コモンズのライセンスに従って、第三者が自由に再配布したり翻案したりすることを著者があらかじめ許諾

している。本書も、この特長をフルに生かした翻訳集といえる。ただし、原著論文の著者と訳者が同一の場合は、著者＝訳者が原論文に加筆修正していることをお断りしておく。

以上は本書の成り立ちに関する特徴だが、中身に関して言えば、核兵器に関わる大物が本書には多く登場していることを特記しておきたい。

いちいち挙げていけば切りがないので、巻頭インタビューの語り手であるジョン・ウォルフスタール氏についてだけ触れておく。同氏は、米オバマ政権時に核問題の大統領特別補佐官を務めた人物である。本書のインタビューでは、辞任後わずか1年あまりしか経っていないにも関わらず、米核政策の内幕を赤裸々に語ってくれており、読み物として興味深いだけでなく、史料の価値もあると自負している。

中でも、核兵器廃絶を願う私たちが考えなければならないことは、米政府関係者の中では核軍縮に関してもっとも良心的立場にあったとみられるウォルフスタール氏ですら、核兵器禁止条約に対してはかなり辛い評点を与えている事実である。

同条約は、たしかに核時代にひとつの画期をもたらしたものではあるが、核軍縮に与えるプラスの効果がまだ証明されているわけではない。だとするならば、本書の主題名にある「核兵器禁止条約の時代」が副題にあるように「核抑止論をのりこえる」かどうかは、これからの課題だということになる。

J-PANDとしては今後、これまでの論考による分析を基礎として、核兵器禁止条約の発効後を見据えた論文を積極的に掲載していきたいと考えている。J-PANDの今後の展開を実りあるものにし、核軍縮への貢献を成すためにも、本書に対する読者諸氏のご意見・ご批判を乞う。

最後に、本書の作成に関わったすべての著者、インタビュアー、訳者、編集者などに感謝を申し上げる。本書に誤りがあった場合は、すべて監修者の責任である。

2019年2月4日

監修者 山口 響